

第8回 国際オリンピック・アカデミー (IOA) 教育者セッションに参加して

大津克哉

Participating in the 8th INTERNATIONAL SESSION FOR EDUCATORS
AND OFFICIALS OF HIGHER INSTITUTES OF PHYSICAL EDUCATION

by

Katsuya OTSU

1. はじめに

2008年7月10日から17日にかけて開催された国際オリンピック・アカデミー (IOA) 主催の「第8回 体育高等機関教育者及び役員のための国際セッション」に日本オリンピック委員会 (JOC) と日本オリンピック・アカデミー (JOA) からの推薦を受けて参加することになった。著者にとっては、2006年の「第46回 IOA 青年セッション」に続き、2度目のオリンピア (ギリシャ) である。なお、青年セッション参加の様子は、『東海大学紀要体育学部第36号 (2007年)』¹⁾を参照されたい。

「体育高等機関教育者及び役員のための国際セッション」の参加者は、体育やスポーツを専門とする教育機関に従事している者で構成されている。そして、古代オリンピック発祥の地であるオリンピアにある IOA の研修センターで世界各国の代表者たちとともに「オリンピズム」に関する研修

を受けた。本稿はその概要をまとめたものである。

〈セッション参加要綱より抜粋〉

「第8回 体育高等機関教育者及び役員のための国際セッション」

期間：2008年7月10日～7月17日

メインテーマ：オリンピズム



写真1 IOA の施設

* 1 東海大学体育学部一般体育研究室

特別テーマ：ユースオリンピック競技会，
子どもたちとスポーツ
その他：募集人数1名
英語に堪能であること
オリンピック研究に関するプレゼンテーションを行うこと
ギリシャ国内の滞在費，交通費は
IOA 負担

2. IOA について

IOA は、近代オリンピックの創始者クーベルタンの遺志を継いだドイツ人のカール・ディームとギリシャ人のイオアニス・ケチアスによって1961年に設立された。IOC の「オリンピック教育」と「文化活動」の一環として位置づけられおり、オリンピズムの研究、オリンピック教育、オリンピック・ムーブメントの推進などを主な目的としている国際機関である。運営については、IOC からの支援を受けてヘレニック・オリンピック委員会（ギリシャの NOC）の管轄のもとで行われている。本部はアテネにあるが、研修用の施設は古代オリンピック競技会が行われていたオリンピアにあり、古代遺跡や各種博物館にも徒歩で行ける距離にある²⁾。

なお、IOA の掲げる目標は運営規則の第2条で下記のように記されている。

- ・オリンピア市に国際的に崇高なセンターを設立することは、オリンピック精神の保護と普及に対応することである。
- ・オリンピック大会の社会的原理およびオリンピックの理想の科学的基礎だけでなく、教育学の研究と応用が IOA の目標を構成している³⁾。

この目標に見られるように、クーベルタンの教育に対する深い造詣によって生まれた「スポーツで教育することによる世界規模での教育改革」を目指した彼の教育的ビジョンは、オリンピアに IOA が設立されたことで実現することとなった。IOA の設立初期の頃は、参加者はテント村で生活し勉強したが、今では建物も充実し、200人収用の宿舎、同時通訳付きの大講堂、図書館、学習室、広い運動施設と生活施設を備えている。IOA

セッションの参加者は多くの会を作り、最近 IOA 参加者連合 (IOAPA) は2年おきに会合を開き、世界中でオリンピック教育を維持発展させるという関心のもとに、情報交換や会合を開いて活動している⁴⁾。

IOA では、青年、大学院生、教育者、NOC や競技団体の役員、ジャーナリストを対象とした各種セッションを開催している。教育者セッションは、隔年ごとに開催され今回で8回目を迎えた。NOC や NOA を代表して一堂に会し、「オリンピズム」や「オリンピック教育活動」等に関する講義が展開され、さらにグループディスカッションを通じてそれらの理解を深めることを目的としている。ちなみに、セッション参加に伴う渡航費や研修費用について、開発途上国からの参加者や一部の NOC/NOA 代表者は、全額を経済支援を行う IOC の一委員会である「オリンピック・ソリダリティー」からの援助で参加している者もいた。ソリダリティーによる経済支援によって、経済的に恵まれない国と地域の人々もオリンピズムという共通の理念のもと、国際交流を通じて様々なアイデアを共有することができ、そこでさらなる専門知識を伸ばし自国に伝え広げることが可能にしている。

なお、筆者が所属している JOA は、1978年に設立された。IOA を頂点とし、世界の137 (2008年5月現在) の国や地域にある国内アカデミーの一つである。世界で6番目に古い NOA として、オリンピックの思想や歴史、オリンピック・ムーブメントの普及や教育、さらに競技だけではない広い視点からとらえてみようというような、オリンピックについて取り巻くさまざまな面に関心を持つメンバーで構成されている。また、これまで IOA セッションに参加した人は100名を超え、日本におけるオリンピック・ムーブメントの重要な担い手になっている⁵⁾。

2-1. クーベルタンの希求した「オリンピズム」の教育的価値

オリンピックというと世間では、「夏季・冬季オリンピック競技大会」、または「金・銀・銅メダル」というように、4年に一度の祭典である競

技大会が連想され、とかく注目も集まる。しかし、本来クーベルタンが現代にオリンピックを復興させた時に、オリンピズムという教育・平和を希求する思想に基づいたスポーツを実践することで青少年達を教育し、それによって平和でよりよい世界の構築に寄与することを目的に「オリンピック・ムーブメント」が展開されているのである。現在IOCは、オリンピズムの3本柱(スポーツ・文化・環境)に基づいてオリンピック・ムーブメントを展開し、16項目にもおよぶ役割を担っている。

参考までに『オリンピック憲章』⁶⁾に明記されたIOCの使命である、世界中でオリンピズムを推進することと、オリンピック・ムーブメントを主導するためのIOCの役割を下記に示す。

- 1, スポーツにおける倫理の推奨およびスポーツを通じた青少年の教育を奨励、支援するとともに、スポーツにおいてフェアプレーの精神が隅々まで広まり、暴力が閉め出されるべく努力すること。
- 2, スポーツおよび競技大会の組織、発展、調整を奨励、支援すること。
- 3, オリンピック競技大会が定期的に開催されることを保証すること。
- 4, スポーツを人類に役立て、それにより平和を推進するために、公私の関係団体、当局と協力すること。
- 5, 団結を強めオリンピック・ムーブメントの独立を守るために行動すること。
- 6, オリンピック・ムーブメントに影響を及ぼすいかなる形の差別にも反対すること。
- 7, 男女平等の原則を実行するための観点から、あらゆるレベルと組織においてスポーツにおける女性の地位向上を奨励、支援すること。
- 8, スポーツにおけるドーピングに対する戦いを主導すること。
- 9, 選手の健康を守る施策を奨励、支援すること。
- 10, スポーツや選手を、政治的あるいは商業的に悪用することに反対すること。

- 11, 選手の社会的かつ職業的な将来を保証するためのスポーツ組織および公的機関の努力を奨励し、支援すること。
- 12, 「スポーツ・フォア・オール」の発展を奨励、支援すること。
- 13, 環境問題に関心を持ち、啓発・実践を通してその責任を果たすとともに、スポーツ界において、特にオリンピック競技大会開催について持続可能な開発を促進すること。
- 14, オリンピック競技大会のよい遺産を、開催国と開催都市に残すことを推進すること。
- 15, スポーツを文化や教育と融合させる試みを奨励、支援すること。
- 16, 国際オリンピック・アカデミー (IOA) の活動、およびオリンピック教育に献身するその他の団体の活動を奨励、支援すること。

このように『オリンピック憲章』を見てみると、多くの人々に連想される「オリンピック競技大会の定期的開催」は、IOCが掲げる16あるミッションの一つにすぎないことが分かる。クーベルタンのビジョンは、4年に一度オリンピックを祝うことよりもっと先にあった。クーベルタンにとって主たる目的は教育的なものであったのである。クーベルタンのリーダーシップのもと、IOCは第1回アテネ大会の翌年の1897年にル・アーブルでオリンピック・ kongressを開催した。その目的は、身体活動とスポーツを普及するために教育的側面について議論し、これを使命として掲げることであった。クーベルタンは常にIOCを励まし、真剣に教育的な役割を担うように勧め、オリンピック大会を通して、あらゆる国であらゆる世代の教育プログラムにスポーツが正当に位置づけられるように努力した⁷⁾。クーベルタンの希求したオリンピズムの教育的価値を正しく伝えていくためにも、オリンピック競技大会への選手派遣や競技成績など、競技ありきの話にならないように、オリンピック教育について重要な役割を担うIOA/NOAの存在は大きい。

3. 教育者セッションの様子

今回参加した「体育高等機関教育者及び役員の

ための国際セッション」では、参加者はみな各種教育機関に所属し、NOC/NOA を代表して参加している。

著者は、「体育」や「スポーツ教育」に携わる者の一人として、オリンピズムの中に見る「スポーツを通じた教育」という思想に注目しており、世界の著名なオリンピック研究者による講義を受講することや、グループディスカッションなどで参加者と積極的に意見交換を図り今後のオリンピック研究のための見識を深めたいという思いを強く抱いていた。特に世界の平和運動として、また、教育としてオリンピック・ムーブメントを誤った方向ではなくしっかりと伝承していく必要性を感じ、この機会に多くのことを吸収しようとギリシャへ旅立った。

3-1. アテネからオリンピアへ

アテネに到着したのが深夜であったが、事前にフライトスケジュールを IOA の事務局に伝えてあったために車が手配されており、空港から市内の指定されたホテルまで問題なく移動することができた。すでに到着している者もいたが、さらに翌日には各国から続々と参加者が集まってきた。今回は、以前参加したマレーシアの NOA セッションで親しくなった仲間とも再会を果たすことができた。なお、マレーシア NOA セッション参加の様子は、『JOA Times 日本オリンピック・アカデミー機関誌 第31号 (2008年)』⁸⁾を参照されたい。

午後からは、仲間を募りアテネ市内の観光に古

代遺跡が集まるアテネのシンボルであるアクロポリスへと向かった。アクロポリスは、古代に神殿が建てられた聖域であり、戦争時には要塞としての役割を果たしてきた。ここにはユネスコの世界遺産に登録されている白い大理石造りの神殿「パルテノン神殿」が存在する。ただただその壮さに驚くばかりであった。この日は参加者同士の交流の機会に充てられていた。翌日には、アテネから IOA の研修施設があるオリンピアに向けてバスで移動した。

3-2. オリンピアにて

アテネから約5時間でオリンピアに到着。2年前の青年セッションに参加して以来、2度目のオリンピアである。しかし、オリンピアの景色はまったく変わってしまっていた。実は、昨年にあった山火事の影響なのである。ギリシャ国内の広い地域で起こった火事は、多くの死者も出した大きな災害であった。古代オリンピック競技場の向かいには、クロノス山がそびえているがすっかり木も無くなってしまい岩肌が現れていた。道路も未だ閉鎖された箇所もあり、前回訪れたルートとは違った道を通して IOA の施設まで向かった。さらに、森の中にあった IOA の施設も背の高い木が無くなり、辺りの景色も眺め易くなってしまっていた。参加者の中には筆者同様、以前に IOA を訪れた者も数名おり、その風景の変貌ぶりに驚きを隠せない様子であった。

IOA 到着後、まず宿泊施設に荷物を置き、正装に着替えて講堂で参加者の出席確認及びセッ



写真2 アクロポリスにあるパルテノン神殿



写真3 山火事の影響を受けたオリンピア市

ョンの注意事項等を IOA 学院長のコスタス氏より話があった。その中で、今回で8回目を迎えるこのセッションに41カ国から体育やスポーツを専門とする研究・教育者約80名が参加している旨報告があった。その後早速講義がスタートされた。青年セッションと比べると日数も短いためにスケジュールがタイトである。

まず、今回のセッションの特別テーマとなっているユースオリンピック競技会についての概要が発表された。これは、新しく IOC 総会で新設が決まった14歳から18歳を対象とするユース世代のオリンピックである。今まで以上に、スポーツを通じた若者の教育に重点を置き、オリンピックのもつ友情や健全な肉体、社会との関わりなどの価値観を訴えるのが狙いとなっている。通常のオリンピック競技会同様4年に一度開催され、夏季は2010年にシンガポール、冬季は2012年にインスブルック（オーストリア）でそれぞれ第1回大会が行われる予定である。

もう一つの講義は、クーベルタンが世界の平和活動や青少年の教育活動の一環として、古代に行われていたオリンピック競技会に注目し、それを現代に復興させたことについて歴史的背景を踏まえた上で、オリンピズムの持つ教育的価値について講義が展開された。

2つの講義と質疑応答を終え参加者は、施設の一角にある広場に移動してセレモニーを行った。その場所では白い石碑を目にすることができるのだが、これはクーベルタンのモニュメントである。クーベルタンの遺志によって心臓はこのオリンピ



写真4 クーベルタンのモニュメント

アの地に埋蔵されているのだ。モニュメントに献花をし、この前で代表者数名がクーベルタンの残したオリンピック教育の大切さを訴える言葉を朗読した。実はセレモニーをした場所も山火事の際にモニュメント付近まで火の手が迫り、うっそうと茂っていた周辺の木々はすっかり見る影を無くしてしまっていた。すぐに JOA をはじめ、多くのオリンピック・ファミリーから寄付が届けられ、IOA 敷地内の植林や燃えてしまったグループディスカッションなどで利用する小屋などを作る費用に充てられているようだ。そして最後に、セッション参加者と IOA 関係者で集合写真を撮影した。



写真5 教育者セッション参加者の集合写真

オリンピア到着の翌日は、ガイドを受けながら古代オリンピック競技会が行われていた遺跡の見学やオリンピア博物館を訪れた。遺跡では、聖火リレーでもなじみの深い、伝統儀式にのっとって採火式が行われているヘラ神殿やスタディオン競走のスタートラインを残す競技場、また、競技場入場門前には競技会で不正行為を行った者へ後世までの戒めとして、「オリンピックの勝利は金銭によってではなく、自らの足の速さと力量によって決せられるべし」と刻まれたゼウス像の台座（英雄だけでなく、不正を働いた者も不名誉なことで永遠に伝えられている）などを見ることができる。これら遺跡や博物館は、オリンピアのダウントウンから程近くに位置する。オリンピアのダウントウンは、メインストリートも300mほど周りにレストラン、カフェ、土産屋などが並んで



写真6 古代オリンピック競技会が行われていた競技場



写真7 採火式を行うヘラ神殿

いる小さな町である。

午前中を市内観光に費やし、また夕方から講義が始まった。そこでは、世界アンチ・ドーピング機構（WADA）に所属し、青少年への教育プログラムを担当されている講師の方の話が興味深かった。取り締まる側と使用する選手とのイタチごっこが絶えないドーピング問題について、これまでは競技団体が独自に検査をしていたわけだが、身内で身内を検査するやり方では問題が表面化しないということで独立した反ドーピングの機関である WADA が設立された経緯がある。ドーピング問題は、もはやいち競技団体の問題ではなく、薬事法の問題などで政府や警察も介入するようになってきている。そこで、通常のオリンピック大会よりも低年齢化するユースオリンピックゲームでは、選手が薬物に手を出さぬようにますます青少年への教育が重要になってくる。

レクチャーの後は、講師を交えて全体の質疑応答が行われる。講義で使用する大講堂は、各座席に同時通訳のイヤホンとダイヤルがあり、講義や質疑応答の時にダイヤルを調節し英語・仏語・ギリシャ語のどの言語でも対応できるようになっている。なお、講義の様子は IOA のウェブサイトで視聴することができる（www.ioa-sessions.org）。その後、講義の内容を受けてグループディスカッションが行われる。1グループが約13名程度で構成され、今回は英語のグループが5グループ、仏語のグループが1グループであった。各グループにはチェアマンが配置されディスカッションの進行、まとめ役をする。

また、セッション期間中に平和を希求するオリンピックズムという思想を再認識すべく参加者全員でオリンピックデーランというイベントを行った。IOA 施設にあるトラックに集合し、国名のアルファベットが A から順に並び、短い距離であっ



写真8 グループディスカッションの様子



写真9 オリンピックデーランの様子

たがバトンリレーを行った。その後、5大陸から代表が選出され、筆者はアジアの代表としてスピーチする大役を任されることになった。このオリンピックデーランの様子は、参加者有志で映像が編集されウェブサイトで鑑賞することができる(www.canberrasec.net/ioa)。

3-3. プレゼンテーション



写真10 プレゼンテーションの様子

教育者セッションでは参加者によるプレゼンテーションが義務付けられている。筆者は、『スポーツマンシップは人類を救えるか〜スポーツ愛好家による持続可能な文明づくり〜』というテーマを示し、倫理的な側面からスポーツマンシップの概念をスポーツの場面だけでなく日常生活においても適応し再考すべきであると述べ、スポーツが今後果たしていくべきその役割について発表した。その概要は以下の通りである。

昨今、国内において企業による耐震強度や食品産地、賞味期限、古紙配合率など立て続けに判明する各種の偽装問題で消費者の信頼を失いつつある状況が度々メディアで取り上げられている。これは、経済中心社会の中で見られる「倫理性を欠く経済の暴走」という、明らかに目先の利益を確保するためなら偽装もやむを得ないという姿勢、コストダウンを図るといった企業が増えているように見え、人間の根底には道徳心があるということをもはや忘れてしまっている感すら受ける。まさに、人間の経済活動が目先の利益を追うあまり意識と行動が背反しているのである。これをスポー

ツの場面で例えるならば、すなわち、「スポーツマンシップ(良識)の欠如」である。そもそも経済中心社会に代表される現代文明の本質の問題は、代々受け継がれてきた先人の知恵や、これまで学校で学習してきた知識と実社会での行動とのギャップが拡大していることが原因なのである。この知識と行動のギャップを狭めるのは持続可能な教育であり、スポーツマンシップである。そこで、スポーツの世界だけの問題にとどまらず、「スポーツマンシップの欠如」に代表され表面化している諸問題の解決に向けて、注目すべきは、社会的一体性と倫理的価値観の習得にとっても重要な手段となり、協力やチームワークを考えるよい機会を与えるという役割を果たす「体育」や「スポーツ」の存在なのである。

例えば、経済活動においてもスポーツマンシップを代表する言葉である「フェアプレー」が前提条件として挙げられるのではないだろうか。フェアプレーといっても、それは単に正々堂々と公正に競技するという個人の倫理的行動を期待するだけではない。そこには合意された規則(ルール)というものがある以上、これをスポーツの場面だけでなく日常生活において応用し、スポーツマンシップ(倫理観)高揚活動の一環として、「フェアプレー精神で経済の健全化」、「チームプレー精神で社会の強化」、そして「エコプレー精神で自然循環の再生」を高めて行動すれば、多くの社会問題は緩和されるであろう。なお、ここで記述した聞き慣れない「エコプレー」という概念は、スポーツを通じた自然環境保全運動と環境教育を実践している世界初の国際的NPOであるグローバル・スポーツ・アライアンス(GSA)^(*)がスポーツマンシップの一環として提唱しているコンセプトで、「持続可能な社会づくりに向けて豊かな自然を守り、省エネ・省資源を実践すること」と定義している。

このように「体育」や「スポーツ」を一つのツールとして効果的に活用していくことで、現代社会が抱える様々な問題に対する倫理的な意識の向上に貢献できると期待される。特に、発表後は多くの人から、スポーツを通じた地球環境問題へのアプローチとしてGSAが推進している「エコ

プレー」というユニークなコンセプトが評価され、その先進的な活動にも興味を持っていただいたようだ。

4. まとめ

今回参加した教育者セッションには、各種教育現場で従事している者が集まった。セッションでは主に、教育思想や平和思想であるオリンピズムについての追求が主題となり、IOCのミッションと役割を担うオリンピック・ムーブメントの内容についてさらに理解することができた。オリンピックというと4年に一度の競技大会や競技成績を連想するが、そもそもクーベルタンが現代にオリンピックを復興させた背景には、オリンピズムという教育・平和を希求する思想に基づいたスポーツを実践することで青少年達を教育し、それによって平和でよりよい世界を構築することへ寄与することを目的にオリンピック・ムーブメントが展開されているのである。選手派遣や競技成績など、競技ありきの話にならないようにオリンピックに関する教育機関であるIOAやNOAがより積極的に、スポーツやオリンピックに興味を持つ人たちに向けてオリンピック・ムーブメントを正しく伝え、理解してもらえよう情報を発信していくという本来の使命を忘れず活動を推進していくことが重要である。

また、セッションの特別テーマとなっていた2010年からスタートするユースオリンピック競技会についての報告では、オリンピックの目指す価値を今一度見直すという意味で、単なる競争の場ではなく、「青少年の教育」、「異文化交流」を軸とする新しい事業としてスタートさせるとの見解が伝えられた。しかし、残念ながらセッションではユースオリンピック競技会について、大会の概要の報告にとどまり、IOCないし2010年夏季大会のシンガポール組織委員会関係者から具体的な教育プログラムの発表はなかった。今後発表される教育プログラムの展開に期待したい。

今回の教育者セッションに参加して感じたことは、メインテーマとなっているオリンピズムという理念についての定義が存在するものの、そもそも根本的なところはオリンピズムに関心を持つ

人々の熱意と人との関係によって成り立つものだと実感した。その基礎となるものは、例えばセッションに参加し共に学び、遊び、スポーツや文化的な活動を通じて交流することや、その理念を知り得る者同士が分かり合うこと、お互いを知らうとすること、というような実に基本的なレベルから成り立っているものだと理解することができた。2度目のIOAセッションであったがオリンピズムを通じた国際交流に貢献し、講師や参加者と親交を深め、自身の研究に関して今後も情報交換をしていけるネットワークを作ることが出来た。この経験を授業に生かすべく、今後の研究に尽力する次第である。

最後に、セッションに参加していた期間中には、一般体育研究室の諸先生方に於きまして担当している授業の調整をして頂きました。この場をお借りして御礼申し上げます。

注および引用・参考文献

- 1) 大津克哉 (2007) 第46回 国際オリンピック・アカデミー (IOA) 青年セッションに参加して、東海大学紀要 体育学部 第36号, pp. 217-223.
- 2) 日本オリンピック・アカデミー オリンピック・ムーブメント研究班編 (2004) 21世紀オリンピック豆辞典, 株式会社 楽, p. 45.
- 3) ジム・パリー, ヴァシル・ギルギノフ著, 舛本直文訳 (2008) オリンピックのすべて—古代の理想から現代の諸問題まで, 大修館書店, p. 367.
- 4) ジム・パリー, ヴァシル・ギルギノフ著, 舛本直文訳 (2008) 上掲書, 大修館書店, p. 369.
- 5) 日本オリンピック・アカデミー (JOA) Webサイト: <http://www.olympic-academy.jp>
- 6) 財団法人 日本オリンピック委員会 (JOC) WEBサイト: オリンピック憲章 Olympic Charter 2007年度版, <http://www.joc.or.jp/olympic/charter/index.html>
- 7) ジム・パリー, ヴァシル・ギルギノフ著, 舛本直文訳 (2008) 前掲書, 大修館書店, p. 366.
- 8) 大津克哉 (2008) 第10回 マレーシア NOA セッション報告, JOA Times 日本オリンピック・アカデミー機関誌 第31号, p. 15.

(*) GSA は、スポーツマンシップの一環として

「エコプレー」の実践を呼びかけているスポーツ愛好家の世界的ネットワークである。この世界的運動は「エコフラッグ・ムーブメント」と呼ばれ、国連機関とともにこの運動の輪を世界各地に拡大させるべく、一般スポーツ愛好家やアスリート、スポーツ団体と共に活動を行なっている団体である。

—関連 Web サイト—

- 国際オリンピック・アカデミー (IOA) : <http://www.ioa-sessions.org>
- 日本オリンピック・アカデミー (JOA) : <http://www.olympic-academy.jp>
- シンガポール2010ユースオリンピック競技会ホームページ : <http://www.singapore2010.sg/day/index.htm>
- NPO 法人 グローバル・スポーツ・アライアンス (GSA) : <http://www.gsa-world.org>